

# 京鹿子

昭和四十四年一月二十日発行  
通巻二六九号(第一編) 三二〇日発行

1月号

京鹿子祭特集号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その七十六



山が哭く風が泣く村大根煮る  
秒針の影を遅らせ冬に入る  
小春抱く母猿の背<sup>+</sup>せはしげに  
道化師の小春の街を遠巻きに  
冬鴟の黙を通して飢<sup>ゑ</sup>隠す  
締切りの魚尾を畳むや年の暮

ポインセチア夢の欠片を紡ぐ夜  
冬蝶の終の影おく尼寺門  
煤逃げや猫の囁く魔女のこゑ

吟行・宇治周辺

僧ふたりしぐれの鐘に早歩き  
宇治橋の翳に相和すしぐれ傘  
冬霧の川の畔に残す憂ひ  
戦なき宇治の渡りの小春かな  
末法の弥陀の眼差し冬の鴟

近詠

和田 照海



俳縁句縁

尽れゆくものしんがり鶏頭花  
菰二つ巻いて海より風通す  
笹鳴や躡り口より波の音  
脳外科の自動扉や冬麗  
俳縁句縁祖師に及びて系露の忌

近詠

松本 鷹根



眺望

眺望は短日名残る朱の入日  
水鳥の群れて輪となる御堂晴れ  
枯れ萩の傾かぶれ慎しむ神の苑  
冬の田に夕影のばす懐古あり  
寺詣で大根焚場の湯気に酔ふ

塩貝 朱千



小春鳥

ち ち ち ち と 父 を 探 し て 小 春 鳥  
 楠 並 木 冬 雲 ひ と ひ ら 遊 ば せ て  
 落 葉 払 ひ 木 椅 子 の 温 度 確 か め る  
 冬 鳶 の 輪 の 小 さ き 日 や 注 意 札  
 故 郷 へ 帰 ら む 枯 野 の 遠 汽 笛

英華採集

榧の実の一つが空に小野の里

枚方 植田 秀子

平安時代の絶世の美女であった小野小町。言い寄る男性を悉く拒絶する女性という小野小町像が出来上がり、かの有名な「百夜通い」の伝説が誕生する。恋文を送った相手の深草の少将は、小町の出した条件の百夜通いの証拠の印として榧の実を毎夜門前に置いていくが百夜目にして大雪のため力尽き榧の実を握り締め凍死する。随心院で見つけた一つの榧の実を見て悲恋の深草の少将へ思いを馳せる作者には小野小町という女性がどのように映ったのであろうか？

蜘蛛の囀を払ふ手の修羅蜘蛛の修羅

福山 門井 千歩

一般的に蜘蛛の種類は、蜘蛛の巣を張る造網性を持つものと徘徊型とに区分され殆どが誹諧型と言われる。掲句の蜘蛛は、糸を張り網を創る蜘蛛であるが庭とか軒に張られた蜘蛛の巣は誰も見た目も悪く駆除したくなる筈である。蜘蛛の身になれば折角張った網を駆除されることは、生活を脅かされるもので迷惑そのもの。そこに、人間と蜘蛛にそれぞれの修羅が生まれることになる。見た目のグロテスクな容貌から知られていないことがある。蜘蛛の大半が人間にとって益虫であることを。

露結ぶ音なき音に麻酔覚む

奈良 瀬 尾 千鶴枝

人体にメスを入れることは出来得る限り避けたいところではあるが、人それぞれの理由により止むを得ない事情がある。作者も覚悟を持つての手術を受け漸く麻酔から目覚めようとしている。この句のポイントの目覚め方「音なき音」とは、如何なる音であろうか？この音は作者の内に潜む呼びかけの声ではないか？新たな「生」を贈ってくれた神様の声である。季語の「露結ぶ」には、三秋の季節の変わり目を感じさせる作者の思いが隠されている。

年新た 沼田巴字

大寒の夜を魔物が背を叩く  
大寒に耐えるものとし一仏書  
あめつちに仏の愛や年新た  
水仙の翳り易さの一並び  
水仙を愛でし人あり僧めける

初日の出 植村蘇星

生かされて生きて自戒の去年今年  
先哲に習ひ生きなむ年新た  
初日の出帆柱きらり曙光浴ぶ  
ホ句ありてこそ的人生おらが春  
生かされて十七恩の初明り

生き下手 北川孝子

昭和てふ時代名残の毛糸玉  
木の椅子の堅さ程よき冬うらら  
生き下手はきつと死ぬまで毛糸編む  
相聞の毛糸玉なり今ひとり  
毛糸編む吾子の幼なをしのびつつ

萩こぼる 直江裕子

コスモスの行きたいところあるやうに  
自らの思ひに疲れ萩こぼる  
蛸の遠い記憶のなかに降る  
ひとり野のひとりの月を大きくす  
黒猫の尾を立ててゆく曼珠沙華

銀杏 高木晶子

虫も寝て開くことなき大辞典  
影といふ影を消し去る秋桜  
金木犀行きたき方へ飛行雲  
新米は湖国の光放ちをり  
銀杏の落ちたる道や絶不調

訣別の文 伊藤希眸

凸凹の選挙秋風すうと去り  
雁渡る遠嶺とうねを峙てり  
浮世絵の流し目と会ふ夜寒かな  
訣別の文なき別れ枯葛這ふ  
とことこと霜月の来る鳥の声

脚蛙 奥田筆子

参道や脚註のごと石路灯る  
循環バスは街の動脈黄落期  
朝顔の首のふり向く犬猫病院  
屁理屈や栗まで他国に剥いてもらふ  
シンビジュームゆらゆら硝子に軟禁す

伯林 井上菜摘子

歌は旅する伯林の冬木立  
空っぽのひきだし父の枯野かな  
一人で生きふたりでダンス月冴ゆる  
人日のブルーブラックインクかな  
梟にふりむいたのは兄ですか

# 神麓集

絹織 村田あを衣

去年今年 井尻妙子

絹織の名刺あつらへ女正月  
初日記漢字忘れをひらがなに  
買初は未来彩どる万華鏡  
ひづめやはらか早春の神馬かな  
置きなほす度に笑はる福笑ひ

口中に溶ける散薬去年今年  
二つ灯のやがて一つに三日過ぐ  
新米美し我ら団塊の世代  
小鳥来る湖国の空を傾けて  
垣間見る地球の疲れ冬に入る

伊賀甲賀 山中志津子

栄華の空 鷺山珀眉

萩揺るる命の接ぎ穂あるやうに  
少年の液晶地図より糸とんぼ  
秋明菊鍛冶の考にも風送る  
コスモスに触れ一陣の風立たす  
伊賀甲賀絡む歴史や吊し柿

産土の栄華の空や草錦  
後の月孤影濃くなる松の闇  
雨催ふ萩の乱れを先ぶれに  
秋思いま乳白色になりすます  
降りそそぐ银杏黄葉のオノマトペ

秋 燕 亀井福恵

モダン・ジャズ 菊池和子

秋燕や流離といふは免れず  
とうすみの憩へる忍び返しかな  
伸び縮みにも要あり雁の棹  
露けしやとんと使はぬ糸切歯  
秋刀魚焼くわが残生をけぶらせて

紅萩の奔放な揺れモダンジャズ  
萩咲かせ地球は探す呼吸法  
百選の心音掬ふ萩の風  
草の野へ吾のまろぶや草紅葉  
からからと陽を巻き上ぐる草紅葉

月夜茸 西村白杼

壺の火色 安田優歌

十三夜峽六軒の鍵かけず  
振り向けば支へられをり白の萩  
ひと目ぼれ胸中うねる萩あらし  
草もみぢ舟石棺の黙の声  
柔和な目もB面阿修羅月夜茸

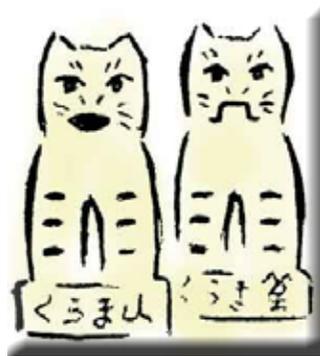
自分史の終章におく大花野  
膝抱けば昭和に還る暮の秋  
紅ささぬくちびるに翳夜寒かな  
マラメルの詩蒼空に聴く暮秋  
備前壺の肩の火色や露むすぶ

旅 愁 本郷 公子

藤袴 万葉がなの相聞歌  
鰯雲 北への旅の時刻表  
旅愁かな小諸城址の草紅葉  
薄紙につつむ片恋十三夜  
千代紙の裏は真白や花桔梗

峡の生活たつき 石原 孝人

開け放つ峡の生活や鳥威  
行く秋や星座にまざる峰里の灯  
小さき田の小さき稲架や峡暮るる  
冬蝶のかそけき風に迷ひをり  
廃線の錆濃き鉄路草紅葉



## 京鹿子大賞受賞作品

岡山市

佐藤 千恵

浅春や身の透けるまで魚干して  
吉報やひいふうみつつ露の臺  
春泥やはじめはほんの遊びから  
大きき夢追ふ春泥のスニーカー  
春北斗こぼれし記憶手繰り寄せ  
紐解くや眼裏にまた花吹雪  
花の風右ばかり向く風見鶏  
取説をよみてもうつろ蝶の昼  
混沌の世を揺れてをり芥子坊主  
夕暮れの端を引き来る黒揚羽

靴底の砂をこぼしぬ風晩夏  
とんぼうの空広々と旅靴  
うつすらと月光纏ふ娘の帰宅  
白線の引き直されて天高し  
時流はみ出す小春日の椅子ひとつ  
いまさらに告知の重さ楯を足す  
焼芋のさめきつてをり反抗期  
湯豆腐のことこと縁深めゆく  
風葬の風かもしれず蝶凍てて  
吹かれぬし遊び足りない冬帽子

## 花洛賞

京都市 竹内久子

山藤の孤高の高さ雲一朵

裏木戸の枢をおとす鹿の声k

代を掻く峡の夕日をこなごなに

月光<sup>ゲ</sup>の神木の瘤獣めく

大植田星ことごとく引き寄する

綿虫はたましひの色日に透くる

ひとところ冥き流れや花菖蒲

枯蓮の五体投地や嶺の風

丸葉を掌にまろばせるそじろ寒

初蝶やわが産土の山の音

## 花洛賞

京都市 山田和

風青し皺<sup>しぼ</sup>の艶めく古柱

苔むせるキリシタン燈籠風花す

走り梅雨太閤塀の暴れ染み

雪の松四百年の反り身かな

百足出づ二条陣屋の隠し部屋

初春の子牛の土鈴弾む音

敗荷の一茎ごとに滅ぶ翳

パレットの穴の親指山笑ふ

本能寺火伏せ銀杏の冬芽鋭し

袈裟懸けの火櫓まとふ初鯉

## 青 秀 賞

京都市 岡 温 子

暗渠へといのちを畳む花筏

久々の開く教会へ夏燕

春昼のコンテナ貨車の歯脱けかな

天狗かな野分あとなる一直線

白南風やペディキュアに浮く海の色

ゆびきりの記憶は風に萩の辻

頬杖をとく風鈴や夜半の旅

常連のこゑに声たす新酒の夜

陽を背に赤き向日葵反抗期

蝸カラのこゑは吉田の虎落笛

## 募集大作賞

岡山市 岸 本 順 子

### 虹の跡

残雪嶺仰げば信濃風の中

山裾の花織工房今朝の秋

藤村の校歌は今もはこべ萌ゆ

杏の精釜にちりばむ虹の跡

草笛の愁ひ残して千曲川

爽やかや真綿の光る糸車

信越五岳村一望の花あんず

秋風と共に紡ぎし漢の手

待ちわびしワルツ舞ふやうあんず祭

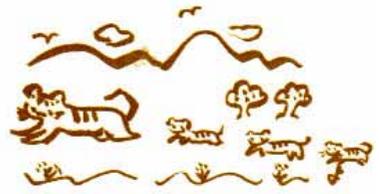
月涼し衣桁に絵紺母在れば

夕鐘に抱かれ杏の馥郁と

星月夜杉の木立に杉のこゑ

あんず熟れ甘き酢っぱき恋のころ

鳩吹きて嬢捨駅の暮れのころ



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

櫃の実の一つが空に小野の里

枚方 植田 秀子

吾亦紅風に逆らふ術も知り

一行の入院日記身にしてみても  
オベ終へて斜に構へる秋鏡

秋深し峠の茶屋の古のれん

こほろぎを逃がしてやりぬベランダへ  
寝返りの背ナを撫づるや秋の風  
アリソナ 伊吹 之博

通ひ路は遠い母里草もみぢ

蜘蛛の囀を払ふ手の修羅蜘蛛の修羅

福山 門井 千歩

デジタルは攫む手遠き日雷

糸瓜忌や床に宇宙を描きたる  
願はくは会ひたき人よ十三夜

美辞麗句見え隠れたる秋の蝶

糸瓜咲く公民館に車なし  
秋しぐれ老人球技中止させ  
酒 田 藤波 松山

天辺の句碑にただある良夜かな

露結ぶ音なき音に麻酔覚む

奈 良 瀬尾千鶴枝

鳥渡る視界三百六十度

草の葉の白露光る朝日かな  
葛蔓や屋根こじあけて上に出づ